

大魔人遂に立つ

襟裳穰司

仮 想 配 役

国立奈良考古学研究所長	吉村作治	泉州大学山口教授	刈谷俊介
大伴金村	ケンドーコバヤシ	土師の巫女(百襲日女命)	浅野温子
若き巫女1	安岐(二役) 浅田 舞	若き巫女2	篠(二役) 浅田真央
天神神社宮司	温水洋一	天神神社禰宜	八嶋智人
万代屋了二	海原はるか	天王寺屋宗及	高橋克美
野遠屋	海原かなた	織田信長	伊勢谷友介
羽柴秀吉	おさる	伴天連	デーブ・スペクター
針井伊予之助	アズマックス	鮎士熊右衛門	ワッキー

1、国立奈良考古学研究所—平成10年8月1日—

「所長、泉州大学の山口先生からお電話です。」

「もしもし、田原です。久しぶり、元気ですか。・・・発掘は何処を掘ってるの。」

○

「・・・堺の翁橋(おきなばし)というと、堺環濠都市(註1)よりも外か・・・。」

○

○

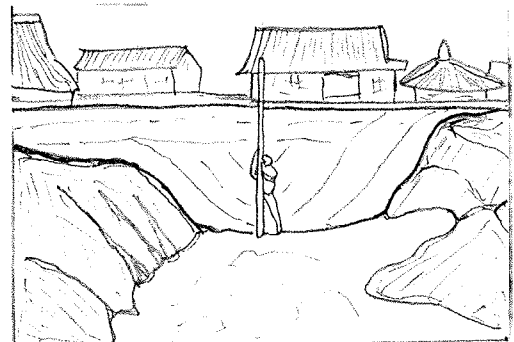
「へえー、そんなにすごいものならすぐ見に行くよ。」

○

「えーと・・・あさっていける。何時がいい。」

○

「昼からがいい、南海高野線堺東駅階段下で13時半ね。それじゃ失礼。」



発掘調査中の堺環濠都市遺跡の濠

1) 戦国時代、繁栄を誇った堺(大阪府堺市)の旧市街のこと。発掘調査で当時の建物や倉が多く発見されている。

2、翁橋遺跡発掘調査現場(1)—平成10年8月3日—

「どうもすみません、わざわざおこしいただいて、天気予報では昼から雨になると言っていたのですが、何とか3時までぐらいはもちそうです。」

「早速だけど物は何処にあるの。」

「あの、シートの下です。」

「じゃ、とりあえず見ようか。」

○

「ずいぶんおおきいね、メスリ(註1)よりも大きいんじゃない。器材埴輪(註2)としては日本一だね。」

「ところが器材埴輪じゃないんです。人物埴輪につく靱(ゆき 註3)なんですよ。」

「え、まさか・・・、確かに背中との接続部がある、しかし、靱だけで3mもあるんじゃない、本体は2.5mくらいあるぞ、こりゃ本体は大魔人クラスだ、信じられんね。」

「実はもっと信じがたいものがあるんですが、・・・あとで、事務所でじっくり見てもらいます。」

○

「・・・この埴輪は、こんな感じで川縁に落ちていたの。」

「発掘されたときは確かに川縁に落ちていたというか、下側の一部は斜めに地面にめり込むような形で、検出されました。丁度、上の方から落ちてきたような感じで、地面に突き刺さっていました。」

「大魔人の背中から外れて落ちてきたみたいに、・・・まさかね」

○

「田原先生、私、大学院修士課程の的場といいます、聞きたいことがあるのですが。」

「なにか」

「ダイマジンというのはどういうものですか。埴輪の新しい器種名ですか。」

「君は大魔人を知らないの。・・・まあ、40年も前の映画だからなあ。・・・東博(註4)の考古陳列館に群馬県出土の重文の人物埴輪があるだろう、あの、靱しよって、剣に手をかけている。あれをもとに今はなき大映が映画を作ったんだ。巨大化した埴輪が大魔人となって悪人をやっつける。結構人気があってシリーズとして3作あったはずだ。山口君は知っているだろう。」

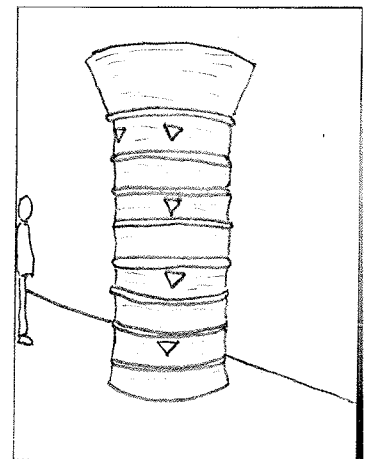
「もちろんです。私が小学生のときです、3作ともみましたよ、たしか本郷功二郎と高田美和がでていました。学生諸君は知らないでしょう。生まれる前ですから。」

「先生、ダイエーってスーパーじゃないですよ。」

「(笑い)・・・大日本映画、略して大映だ。これがわかるのも、ここでは山口君と私だけだな。」

「ぼつぼつ降ってきましたね。所長、では、事務所のほうへ。」

- 1) メスリ山古墳 奈良県桜井市内の古墳。高さ2.42mの日本で最も背の高い特殊円筒埴輪が出土している。
- 2) 埴輪には、古墳の周りに立てる「円筒埴輪」、動物をあらわした「動物埴輪」、様々な身分の人間をあらわした「人物埴輪」とともに剣や壺などの道具をあらわした「器材埴輪」がある。
- 3) 矢を入れ背中に背負う箱のような器
- 4) 東京国立博物館のこと



メスリ山古墳出土埴輪
奈良県立橿原考古学研究所

3、翁橋遺跡発掘調査事務所(2)ー平成10年8月3日ー

「的場君、コーヒーを入れて。木村君1地区の例のコンテナもってきて。」

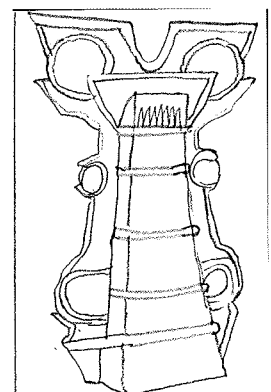
○

「所長。これを見てください。まずこの破片から。」

「何か順番があるのかね。・・・これは、あの、瓦質甕(がしつかめ 註1)の破片じゃないの。中世の。外側の叩目の具合もそうだし、これだけ厚い破片はかなり大きな甕だね・・・。」

「ところが、この破片はこちらの特殊器台(註2)の破片に付くんですよ。・・・どうです。」

-
-
-
-
-



靱型埴輪-大阪市

「これは、・遺構は、・時代は。」

○

「百舌丘陵(もずきゅうりょう 註 3)のほうから流れてくる川の底から16世紀戦国時代の一括遺物(註 4)と一緒に出土しています

○

○

「信じらねんね。この模様はどうみてももの弥生時代の宮山型特殊器台だ。しかし材質や模様は中世の瓦質甕だ。・えーと1500年の時代差と岡山と堺との距離がある。・1500年前の弥生時代の岡山の特殊器台をなんのために16世紀の堺の連中が作った。・わからん。まったく、わからん。・とここで、胎土分析はしてみたの？」

○

「それが、胎土のほとんどは、百舌丘陵から流れでて沖積層(註 5)に堆積した土、つまり地元の土なんですけど、・わずか1%ぐらい岡山の足守川流域(註 6)の土が混じっているんですよ。」

○

○

「つまり、中世の職人はわざわざ岡山から足守川流域の土を取り寄せて、地元の土に混ぜて特殊器台をつくれたわけか。弥生時代の葬送の祭を戦国時代になって復原・実行した新興宗教でもあったのかねえ。・こりゃ記者発表したら大変な騒ぎになるぞ。・山口君、とんでもない物が出たね。とにかく、私は・頭が・爆発しそうだよ。まったく、理解不能だ。」

○

○

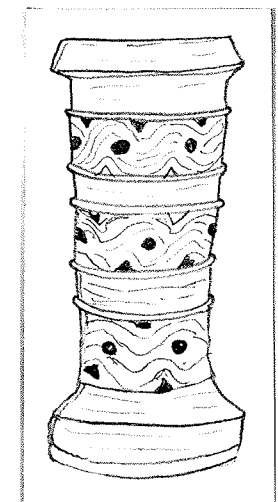
「本当に困ったことです。あ、コーヒーが冷めますからどうぞ」

「・どうもありがとう。・記者発表は慎重にね。岡山県や科学分析の連中、文献の連中ともよく協議してね。」

「・はい、承知いたしました。じっくりやります。・木村君、雨が本降りになってきたから、調査区全部の排水ポンプのスイッチを入れてきて。」



大魔神モデル埴輪



<重要文化財>

特殊器台

総社市宮山遺跡出土

弥生時代

岡山県立博物館蔵

- 1) 室町・江戸時代堺近郊で作られた瓦に似た色と性質を持つ柔らかい焼物、壺・甕などがある。
- 2) 弥生時代終わりに作られた埴輪の原型とされる円筒型の土器、弧文帯という特殊な文様が彫られている。岡山県の吉備地方から多く出土している。
- 3) 堺の西にある丘陵で仁徳天皇陵・履中天皇陵をはじめ巨大な古墳が多く築かれている。
- 4) 考古学用語で「年代の決まっているまとまった出土品のこと」
- 5) 丘陵地ではない平野のこと
- 6) 岡山県総社市にある川、周辺には特殊器台が立てられた弥生時代の埴丘墓(古墳のような墓)がある。これらの墓に建てられた特殊器台は足守川流域の土で作られている。

(オープニング・テーマ 陵王乱序)

* 笛・鉦・太鼓だけで演奏される雅楽の格調高い曲、

4、河内の国土師館(はじのやかた)(註 1)の門前 (古墳時代—西暦531年—)

「大連(おおむらじ)大伴金村(註 2)じゃ。」

「夕方までにお着きとのことは、巫女君(みこぎみ)より伺っております。」

「・・・だれにも言わずに来たのに。巫女の力はまだ衰えておらぬようだな。」

「濡れたお召し物をお召し替えの上、齋殿(いみどの)までおこしいただくようにと。」

「うむ。」

- 1) 土師の名の付く集落は旧河内国内では東大阪市にも存在するが、この話では百舌古墳群に隣接した堺市土師(はぜ)町をモデルとした。
- 2) 6世紀前半の大和朝廷で大王(おおきみ)を補佐する実力者。大伴氏は軍事を担当する大豪族、そのトップが大連。

5、土師氏館の齋殿(いみどの)

「大和の国からこの雨の中をさぞやお疲れのことでござりましょう。」

「大和の者は皆疲れておる。・・・巫女よ何でわしがここへ来たか、もう分かっておろうな。」

「大王(おおきみ)様、大兄の御子(おおえのみこ)様、弟君様が相次いで、神上(かむあが)られたこと(註 1)は、占いにより既に存じております。」

「巫女よ、それほどの力を持ちながら、なぜこの凶事(まがごと)が祓えぬのじゃ、去る年より夏に雪が降り、稲は枯れ、野山に獣なく、川池に魚の影もない、御陵(みささぎ)は夜毎(よごと)に鳴動(なりゆる)ぎ、遂には御三君様(おさんきみさま)が神上られた。これほどの凶事の因(ちなみ)は何じゃ、巫女の力をして何故見透せぬのじゃ。」

○

「大連様、この二年(ふたとせ)に渡るさまざま凶事の因はこの巫女の力を持ってしても見そなわすことは叶いません。ここに控えし若き巫女と力を合わせ命を限りに祈っても、凶事(まがごと)の因(ちなみ)を見そなわすことはかないません。」

○

「ほう、見目良き巫女じゃ。大兄の御子様(おおえのみこさま)奉(たてまつ)れば、さぞかし喜ばれたであろうに。今はそれも叶わぬ。・・・巫女よ凶事を祓う何かよい策はないのか。」

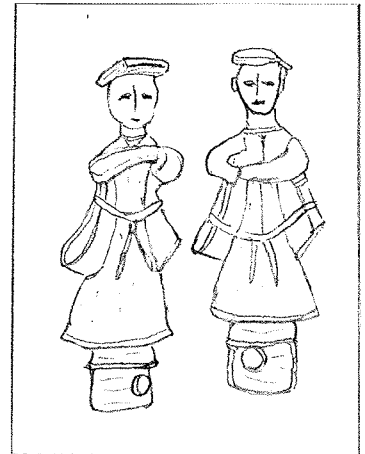
「大連様、最後の頼みの綱がございます。しかし、巫女の体は老い衰え、一月の猶予もございません。いそぎ、この事を、とりおこないませんと手後れになります。どうぞお力添えを。」

「なんだ、まだ、頼みの綱があったのか。申してみよ。」

「この凶事を占う事は、巫女の力の及ぶところではございません。そこで、我等の大御祖百襲日女命(おみおやももそひめのみこと)(註 2)の御霊(みたま)を黄泉路(よみじ)から呼び奉り、我が身に憑(つ)かせ奉り、この凶事を見そなわせ願い奉ります。百襲日女命を黄泉路から呼び奉るには、大いなる齋殿と多くの供物、そして、多くの土師の族(うから)の力がいらします。大連様お力添え願います。」

「よし、わかった。それしかないなら仕方がない。急ぎ齋殿を建て、供物も用意しよう。土師の族には何をさせるのじゃ。」

「できるだけ多くの族(うから)を集め、心を一にして祈ります。」



巫女の埴輪 京都府埋蔵文化財センター

「よし、大和、河内、山城、近江に急ぎ使いを出し、できるだけ多くの土師の者を集めよう。齋殿もたてる、供物も用意する。それでよいのだな。」

「お願いいたしまする。」

- 1) 「三国史記百済本紀」に「壬申の年(西暦 531 年)に倭国(日本)の王・王弟・皇太子が相次いで死んだと」という記事がある。百済とは 5~7 世紀に朝鮮半島西部にあった国で「三国史記百済本紀」は百済の歴史書。
- 2) 第七代孝靈天王の皇女。倭頭迹迹日百襲日女のこと。奈良県桜井市の箸墓古墳(全長 250mの大前方後円墳)に葬られたとされる。箸墓古墳は「夜は神が造り、昼は人造った」という伝説がある。土師氏が古墳の造営にあたり元は「土師墓」で呼ばれていたという説もある。邪馬台国大和説をとる学者では百襲日女こそ女王卑弥呼だとしている者もいる。

6、土師氏館の齋殿（一ヶ月後）

「巫女は何時から籠っておるのじゃ」

「は、もう五日前から。」

「族の者もか」

「は、若き巫女、族の者合わせて五百余りの者が籠っております。」

「そんなに籠って、よく床が抜けぬな。」

○

「大連様、巫女君がお呼びです。齋殿へお越しください。」

○

「祈りは終わったのか。ん、随分やつれたな、顔色が悪い。・・・この人いきれと暑さは酷い、戸は開けられんのか。」

「大連様、お静かに、百襲日女命の御霊(みたま)は黄泉路を旅立たれ、この世の近くまでお運びでございます。今日これから最後の祈りをいたします。巫女の命はもう今日一日限りでございます。何とか百襲日女命に憑きいただきませぬと、百襲日女命は再び、黄泉路へ戻られ、二度とこの世にはお運びになることはありません。大連様、巫女や族とともに祈りください。」

「よし、祈ろう、巫女よ頼んだぞ。」

「若き巫女、族の者よ祈るじゃ」

「・・・大王の御門に仕へまつる領布(ひれ)かくる伴の緒(とものお)・・・、襷(たすき)くる伴の緒・・・、鞆負(ゆきおう)う伴の緒・・・、太刀佩く(たちはく)伴の緒・・・、八十伴の緒(やそとものお)を始めて・・・、官官(つかさつかさ)に仕へまつる人等の・・・、過ち犯しける雑雑(くさぐさ)の罪を祓えたまへと・・・、清めたまへと・・・、申すこと聞こし召せと申さく・・・。おおーおーおーおーおーおーおーおーおーおーおー。」(のりと)

○

○

「なんだいまの光と音は、雷(いかづち)か。おい、おい、巫女よ、おい、雷に打たれたか、おい、死んだのか、おい、生きておるのか。」

○

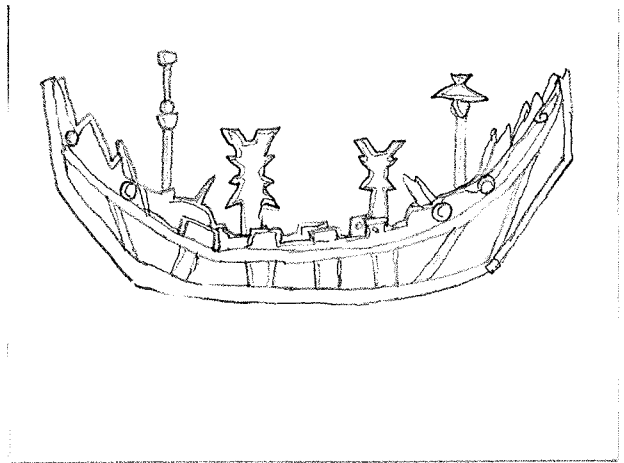
○

「大連大伴金村よ、吾は土師の大御祖百襲日女命なり、汝(なんじ)が大王(おおきみ)に仕え、大王を扶けまいらせておることは、知り及んでおる。汝、聞き知りたきことを吾(われ)に直(じか)に聞くのじゃ。吾が憑きし巫女の命はあと一刻ももたぬ、疾(と)く聞くのじゃ。」

○

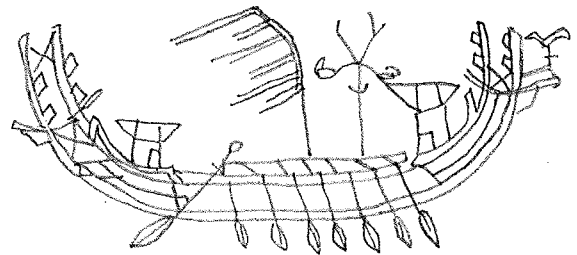
○

「・・よし、では聞こう、去る年より夏に雪が降り、
稲は枯れ、野山に獣なく、川池に魚の影もない、
御陵は夜毎に鳴動ぎ、遂には大王様、大兄の御子
様、弟君様が同じ日に神上られた。これほどの凶
事はいかなる因によるのじゃ。いかなる祟りじゃ。」
「大連よ。この祟りの因(ちなみ)を現世(うつしよ)
のものが見そなわすことはできぬ。なんとなれば、
その、因は黄泉路(よみじ)にあるからじゃ。」
「なんと、黄泉路と・・・命よ、その因がなんじゃ。」
「大連よ、しかと聞け、この凶事の因は、・・黄泉路
なるオオサザキ様(註 1)とホンダワケ(註 2)様のお
嘆きじゃ。」



松坂市宝塚 1 号墳出土船埴輪 松坂市蔵

「なんと・・しかし、なにゆえお嘆きになるのじゃ。」
「オオサザキ様とホンダワケ様は、この大和の国の
礎(いしづえ)をつき固められた並外れた御力をお持
ちの大王様じゃ、黄泉路へ参られてもそのお力はい
ささかも衰えることがない。過ぎし世は言うに及ば
ず、先の世を見そなわす力までお持ちじゃ。それゆ
え、両大王様の御陵が先の世において、酷く損なわ
天理市東殿塚出土埴輪に描かれた船・軸先に鳥がいる
れてしまうことを見そなわされた。オオサザキ様の御陵の上には武士(もののふ)どもが群れ集い、立
物(たちもの 註 3)を壊(こぼ)ち、櫓(やぐら)を上げ、穴を穿ち、御屍(おんかばね)まで暴んとしてお
る、ホンダワケ様の御陵は大いなる地震(ちゆるぎ)により、大きく傷み、御棺(おんひつぎ)が傾ぶいて
おる。惨いことじゃ。オオサザキ様、ホンダワケ様お嘆きは、地を揺るがし、大風をおこし、日を陰
らせ、現世(うつしよ)にまで凶事(まがごと)を及ぼしておる。」
「大サザキ様の陵を壊(こぼ)つ武士(もののふ)どもは、どこの族(うから)のものだ、そして、大いなる地
震はいつ起こったのじゃ。」
「武士どもが、群れ集っておるのは遙か先の世じゃ。一年(ひととせ)が十(とお)で十年(ととせ)。十年が
十で百年(ももとせ)、百年が十で千年(ちとせ)、今この年より、千年が一度、十年が四度、それに四つ、
年を足した年。これほど、先の世じゃ。大いなる地震がおこるのは、その少し前じゃ。」



○
○

「大サザキ様とホンダワケ様は、それほど、先の世のことで御嘆きなのか。命よ、それほど先の世の凶
事をどのようにして、防ぐのじゃ。両大王様の御嘆きはどのようにすれば、収まるのじゃ。」

○
○

「鳥船(とりふね)(註 4)を呼ぶ。」

「鳥船。」

「これほど先の世に罷(ゆ)くには、鳥船に乗るより他ない。黄泉路より鳥船を呼び、ここにある若き巫
女を乗せて、先の世に遣わし、両大王様の陵を損なう悪しき武士(もののふ)を滅ぼし、両大王様の御
霊(みたま)を安んずるのじゃ。さあ、族の者よ祈るのじゃ。鳥船を呼ぶのじゃ。」

○

「汚らわしき疫の鬼・・、処々村村(ところどころむらむら)にこもり隠らふるをば・・、千里のほか、
四方(よも)の堺、汝行けたまひて・・、急に罷(ゆ)き往ねと追ひたまへ・・。姦(かしまし)き心を挟みて、
留まり隠らば・・、五の兵を持ちて、追ひ走り刑死(ころさ)むものとぞ聞こし召せ・・。おおーおお
おーおおー。」(のりと)

○

○

「なんという、魂振(たまふり)だ。斎殿が倒れるようじゃ。土師の巫女とは全然違う。」

○

「大連様、南の空に大いなる船が浮かんでおりまする。」

「なんと、早くも来たか、巫女がよければ、鳥船もすぐ来るもんじゃ。」

「鳥船は間もなくここに来る。・・族の者よ。剣(つるぎ)を二筋持て。」

○

「若き巫女よ。さあ、剣を持て、お互いに突きあうのじゃ。・・鳥船には現世(うつしよ)の身では乗れぬ。御霊のみが乗ることを許される。突きあい、現世(うつしよ)の身を捨てるのじゃ。」

○

「命さま。吾は土師の宰(みこ)もち 註 5)でございます。謹んでお願い申し上げます。巫女君は間もなくみまかるとの事、巫女君亡き後、我等土師の族の神祭(かみまつり)は、若き巫女より他おこなえませぬ。なんとか若き巫女の一人な現世に残ることはかないませぬか。」

「役割を果たすには二人の力が必要じゃ。・・宰よ案ずることはない。二人は一年(ひととせ)の後、役目を果たしこの土師の里に戻ってくる。さあ、若き巫女よ剣を手にして突くのじゃ。もう、鳥船が来る、疾く突くのじゃ。突くのじゃ。」

○

○

「今、鳥船がこの上を渡ってゆく、御霊も、無事鳥船に乗った。」

「・・吾が憑きし巫女の命もあと僅かじゃ。吾も黄泉路へ戻らねばならぬ。族の者よ。この後の働きを言う。決して聞き損じてはならぬ。まず、毛野(けぬ)(註 6)の国より土師の立物(たちもの)作りを呼び。二十尋の高さの大いなる立物を作り、オオサザキ様の御陵(みささぎ)の堀に沈めるのじゃ。巫女の屍(かばね)、若き巫女の二つの屍はオオサザキ様の御陵に低き峰に埋めるのじゃ。屍はただ埋めるのではない。一尋の深さに若き巫女。その一尋下にもう一人の若き巫女、その二尋下に吾が憑きし巫女の屍を埋めるのじゃ。」

○

「若き巫女が、役割を果たして帰る一年(ひととせ)後、凶事は収まる。・・大連大伴金村よ、すべては語った。吾は黄泉路へ戻る。」

- 1) 第十六代 仁徳天皇 御陵は堺市の百舌(もず)にある日本最大の古墳であるが、戦国時代は砦が築かれていた。
- 2) 第十五代 応神天皇 御陵は羽曳野市にある日本で 2 番目の大きさの古墳。16 世紀代の地震で墳丘の一部が崩落している
- 3) 埴輪のこと
- 4) 天の鳥舟 黄泉の国に御霊を送り届ける舟。鳥(カラス)が舳先に立っていることが特徴。三重県松阪市の宝塚古墳から鳥舟の埴輪が出土している。
- 5) 族長のこと
- 6) 古代の群馬県・栃木県のこと。大和・河内で埴輪づくりの技術が低下した 6 世紀に毛野地方では写実的で優れた埴輪が作られた。

7、天正 3 年 (1575 年) 泉州 堺 天神神社宮司(註 1)の館

「禰宜(ねぎ)殿(註 2)、安岐(あき)はまだ床に伏せっておるのか。」

「はあ、まだ一歩たりとも部屋から出ませぬ。医者にも決して会わず、薬も飲まず、流行病(はやりやまい)になってしまった。うつるから部屋近づくなど申しております。」

「来る月は例大祭じゃ。例大祭で神楽を舞うのは安岐と篠(しの)にきまっておる。」

○

「篠も心配しております。しかし、見舞いにいっても決して会おうとさせぬ」

「困ったことだ。」

○

「宮司(ぐうじ)殿。」

「篠か。」

「はい」

○

「先ほど、安岐に見舞いに参りました。部屋の中からしっかり鍵を閉めておりましたので、会うことは叶いませんでしたが、板戸越しに話をしてみました。」

「どうだった。」

「はい、安岐が申すには、十日程前、酷い雷の夜がございました。その折、南の空に大きな岩のごとき船が浮かんでいたそうでございます。その船が社殿の上に飛んできて、舳先にとまっていた鳥の目から稲妻が出たそうでございます。安岐はその光を見たとき、気を失ってしまい。朝になって目が覚めると、惨いことに体中に縞模様のような痣ができており、熱も下がらぬことから、安岐は流行病にかかった、もう間もなく死ぬと申しております。」

「来る月の例大祭で神楽を舞う巫女は社家のなかでも二人しかおらぬ。しかし、流行病ではかなわぬな。・・禰宜殿、何とかならぬか。」

「もはや、南蛮人を頼る以外ありません。堺の納屋衆(なやしゅう 註3)に万代屋(もづや 註4)があります。万代屋は我ら一族とゆかりの者です。万代屋を通じて、南蛮人から流行病に効く薬を取り寄せるよりありません。」

「しかたがない、禰宜殿、使いにいってくれるか。」

「承知いたしました。・・宮司殿、その前に、少し気になることがございます。申し上げてもよろしいでしょうか」

「何じゃ。」

「安岐が申しておりました大きな岩のごとき船ですが、」

○

○

○

「まさか、・・鳥船ではあるまいな。」

「鳥船は、高天ヶ原から、神々が御降臨されたときの御乗物として知られております。しかし、土師の古き言伝えでは、御霊を黄泉路に送る折りや、黄泉路から祖神様(おやがみさま)が現世(うつしよ)にお越しになる時にも鳥船を使われるといひます。安岐は、船の舳先にとまった鳥の目から稲妻が出たと申しておるようですが、その折に祖神さまが憑き奉ったかもしれません。それから、安岐の体に出てきた痣も気になります。」

「ほう。」

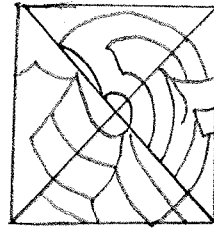
「はい、やはり、土師の古き言伝えでは、土師の祖神様が巫女に憑き奉るとき、その巫女の体の一部に御印(みしるし)(註5)が現れるといひます。しかし、体全身に痣が出来るということは、とてつもなく大きなお力を持った方、もしや大御祖様が憑き奉られたかもしれません。」

○

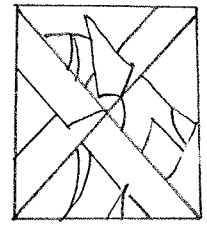
○

「申し上げます。宮司殿、安岐が先ほど部屋を出ました。今、本殿に向かっております。」

「なんと、禰宜殿、篠、わしと一緒に来られよ。」



A



B

直弧文(御しるし)

- 1) 天神神社は堺市の菅原天神がモデル。菅原氏は土師氏の末裔である。
- 2) 神社では二番目の地位にある神職、一番目は宮司。
- 3) 中世の堺の町を支えていた数十人の大商人。世界中に船を出し、富を蓄えていた。
- 4) 堺の大商人。一族の百代屋宗安は千利休の娘婿。今回、登場する百代屋は二はその父で名物肩衝「抛頭巾」を代々所有していた。百代は土師氏ゆかりの名である。
- 5) 弥生時代に起源があり、日本独自も文様である直弧文(ちよっこもん)のこと。巻貝の断面を図案化した文様でまじないに使われた土器や埴輪に印されていた。

8、天神神社本殿 (1)

「土師の族(うから)の者よ、吾は、千年(ちとせ)より古き、いにしへの世より参る土師の巫女なり。彼の世は人心(ひとごころ)が乱れ、凶事が数多(あまた)おき、大王様(おおきみさま)は大兄の御子様、弟君様が相次いで神上がられた。我等は大御祖百襲日女命(おおみおやもそひめのみこと)を、黄泉路より呼び奉り、凶事(まがごと)の因(ちなみ)を御占いさせたもうた。凶事の因は、この世の悪しき武士(ものものふ)どもがオオサザキ様の御陵(みささぎ)を損(そこ)ない、ホンダワケ様の御陵(みささぎ)が地震(ちゆるぎ)により損なわれた事によることが判った。吾は百襲日女命の命を受け、その悪しき武士どもを退治し、オオサザキ様、ホンダワケ様の大御心を安んずるために、鳥船に乗り、この世に参り、土師の祖神(おやがみ)を祭る社の巫女に憑(つ)いた。今より、族(うから)の力を得て、大事な働きせねばならぬ、・・・この世の土師の宰(みこともち)は誰か。」

○

○

(震えながら) 「この世では、土師の一族も多く枝別れして、様々な新しい姓(せい)を名乗っております。今、土師の宰(みこともち)はおりませぬが、この社(やしろ)で行う祭には、土師の流れを汲むものは、皆集(つど)います。その例大祭が来る月に行われます。私はその祭を司る宮司(ぐうじ)です」

「彼の世と今の世は違う。・・・しかし、この働きは、土師の族の者しか行えぬ。宮司よ土師の族とともに吾に力を貸すのだ。吾とともに両大王様の御陵を損なう者を滅ぼすのじゃ。」

○

「宮司殿、祖神様が憑いた安岐を見なされ。顔にも、手足にも御印(みしるし)が現れておる。おそらく肌すべてにも御印が見られるはず。巫女様は彼の土師の大御祖百襲日女命様の命を受けてこの世にこられたとのこと、安岐に見られる御印は、百襲日女命様のはかりしれない御霊(みたま)の力の証(あかし)です。御言葉に従わねば我等は滅ぼされます。」

「しかし、禰宜殿。オオサザキ様の陵(みささぎ)といえば、百舌鳥耳原の御陵(みささぎ)であろう。あそこの上に砦(とりで)を作っているのは松永弾正(註1)の兵(へい)じゃぞ、武器もない社家(しゃけ)の者がどうやって戦(いくさ)うのじゃ。」

○

「宮司よ、心配は要らぬ。戦(いくさ)うのはオオサザキ様の陵(みささぎ)の堀(ほり)に沈(しず)み置きし立物(註3)である。吾は禰(い)のりにより立物に御霊(みたま)を注ぎ入れ、命を得た立物(たてもの)を使役(つかい)して、悪しき武士どもを滅ぼす。汝等(なんぢら)は立物(たてもの)に御霊(みたま)を入れる祭(まつり)の支度(しど)をし、祭器(まつりぐら)を集めればよいのだ。」

○

「宮司殿、御言葉に従いなされ。すべてが土師の古き言伝(ことづ)えどおりじゃ。」

○

「分かり申した。さあ、巫女殿、我等に段取り(だんとり)を申し付けられよ。何事(なにごと)にも従(したが)おう。」

- 1) 戦国大名で居城は奈良の多門山城。將軍足利義輝を殺したり、東大寺を焼討ちしたりしたので悪逆大名とされる。天正五年(1577)信長に攻められ爆死した。

9、天王寺屋宗及(てんのうじやそうきゅう)(註1)の屋敷(1)

「旦那様、万代屋了二様お越しにございます。」

「これは、万代屋殿、ようこそお越しいただきました。」

「御忙しいのに申し訳ない。……宗及殿、実は貴殿にしか頼めぬ願いがあってまいりました」

「それは、それは、それがしのような者で役にたちますかな。」

「いや、話せば長くなるのですが。……丁度、一月ほど前の雷の夜、大鳥大社(註2)の上に大きな船が浮かんでいたのはご存知ですか。」

「この、屋敷や町内の者にも何人か見た者がおるようですが、私にはどうも信じられません。船の形をした雲でもあったのではありませぬか。」

「その船はやがて天神神社の方に飛んでいったそうです。……それで、……それがしは、天神神社の禰宜とは親戚筋にあたり、宮司とも親しくしておるのですが、二十日程前、肝を潰すようなことを聞きました。」

「ほう、一体どのような」

「社家の者の先祖である祖神(おやがみ)が、大きな船に乗って前世からやってきて、安岐という巫女に憑いたそうです。」

「まさか、安岐というと、あの見目良き巫女かな、もう一人の巫女と踊る例大祭の神楽(かみまい)は、納屋衆にも評判じゃ、松永の侍まで見に来るといふ。」

「宗及殿、貴殿は茶の湯ばかりの方かと思いましたが、……隅には置けませんな。」

「百代屋殿、戯言(ざれごと)でござる。そう言えば、今年の例大祭は一人の巫女だけで神楽を舞っておりましたな。皆も興醒めじゃと申しておった。」

「それが、篠という巫女で、祖神が憑いた安岐の方は、その後、次々に託宣(たくせん)をし、神社の者は右往左往しております。」

「そんなことがあったとは、」

「それで、十五日前、丁度、祭の翌日のことです。宮司と禰宜がうち揃って、やって参りました。それで、千貫(註3)ほど、貸せというのです。」

「それは、随分の大金ですな。」

「私も吃驚して、何に使うのかといえ、船を仕立てて、備前の国に下り、なんとかいう神社(註4)から御神宝の大石を二個ほど持って来るというのです。」

「千貫は石代ですか。」

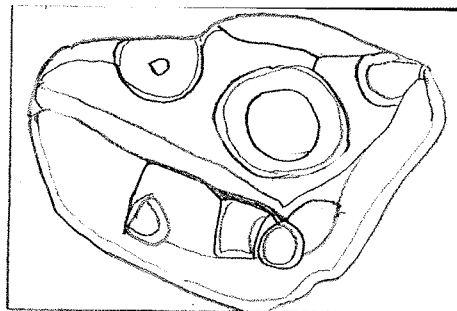
「いや、御神宝はただで貸してくれるそうで、……ところが、用件はそれだけではないんです。……次は、土器(かわらけ)作りを紹介しろと言われました。」

「土器作りとな」

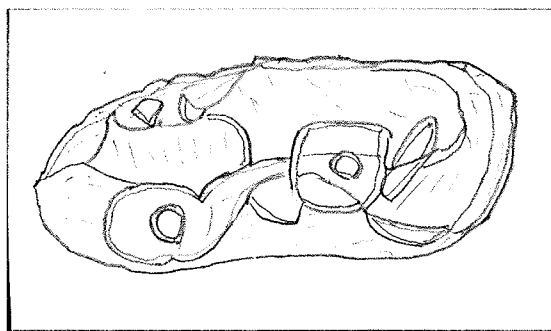
「備前に石を取りに行った折り、その、何とか言う神社の近くの足守川(あしもりがわ)とかいう川の神砂と神泥を取集め、塚に持帰り、土器作りに命じて、筒のような置物を作らせるそうです。置物の指図まで出来ており、私もその指図を見せてもらいましたが、高さは四尺ほどで、見たこともない不思議な模様が彫られておりました。」

「何で、土器作りに。」

「土器作りは壺でも甕でも言うたとおりに作ります。私は知り合いの特に手先の器用な土器作りに命じて土が来たらすぐ置物が出来るように準備をさせておきました。」



神石・大(荒御霊が封印)



神石・小(和御霊が封印)

「石を運んだり、土器を作ったりするのは、何のためですか」

「私が聞くと、宮司はしばらく言いよどんでおりましたが、意を決したように、安岐に祖神が憑いて、宣託を始めた話をしました。そして、凶事がおこるゆえ、それを防ぐために安岐の言うとおりに、祭をせねばならぬ。その祭の調度に石や土器があると申しました。」

「そんな調度を使った祭は聞いたことがありません。」

「とにかく兩人ともすぐに千貫貸してくれ、神社の料地、神宝全部担保にするから貸してくれと、懇願されました。」

「貸したのですか」

「私も神社とはゆかりの者ですから、担保はいいからといって貸しました。とにかく、急ぐ、急ぐと言うので、店中の金を集めて、千貫渡しますと、翌日にはもう船を仕立てて備前に出発しました。」

「備前は毛利の領地だ、船が着けるのですか。」

「二人はそれすらも知らない様子でしたので、毛利の水軍にあつたら渡して命乞いをするようにと、別に金を百貫ほど持たせました。」

「それで、船は、昨日なんとか無事堺に戻ってきました。ところが、大石二個は、持ってきたのですが、神砂と神泥は足守川の流れが変わってしまい、とうとう見つからなかったそうです。そこで、急遽、安岐に宣託を頼んだところ、近江国坂本村なる壺笠山(註 5)の頂(いただき)に足守川の神砂と神泥から作った立物があるので、それを持ち帰り、使うように言われたそうです。」

○

「坂本村の壺笠山といえば、明智殿が延暦寺攻めの砦を築いておる所ではありませぬか、そんなところに行けば、敵と間違えられて討ち取られますぞ。」

「宗及殿、そこをお願いでござる。貴殿が明智殿と特に親しくしておられることは聞き及んでおります。どうか、お願い申し上げます。明智殿宛の文をお書き願えませんか、社家の者に持たせてやる文を、安岐いや、安岐に憑いた祖神様(おやがみさま)が申しておるのです。とにかく大変な災いのようです。どうか、なにとぞお願い申し上げます。」

- 1) 堺の納屋衆の中でも最も多くの富を蓄えた大商人、茶人としても沢山の名物茶道具を所有していた。茶道を通じて織田信長・羽柴秀吉・明智光秀などの戦国武将とも交流した。
- 2) 平安時代に創建された和泉の国一ノ宮(和泉の国で最も格の高い神社)
- 3) 一貫が一両にあたるので千貫は千両にあたる。
- 4) モデルは岡山県倉敷市の楯築墳丘墓(たてつきふんきゅうぼ)と墳丘上におかれた祠である。墳丘墓は古墳の原型と見られる弥生時代の墓。祠には「亀石」という円弧文の描かれた御神体の石が置かれ墳丘墓からは亀石に似た小型の石の破片が出土している。
- 5) 滋賀県大津市の比叡山山麓にある山。当時、延暦寺攻めを行うため明智光秀が山上に城を築き布陣していた。もともと山上には古墳があり弥生土器の特徴を伝える古い埴輪が出土している。

10、百舌鳥耳原御陵の砦(1)

「熊右衛門、あれはなんだ、あそこで、なにをしておるのだ」

「さあ、何でございましょう」

「変な筒のようなものを運んでおるな」

「御御城代様、天神神社の宮司が話をしたいと来ておりますが。」

「よし通せ」

「御御城代様、天神神社の宮司にございます。御城の目の前で祭を行いますゆえ、ご挨拶に参りました」

「何を行うのじゃ」

「齋庭をつくり、一昼夜かけて民草のために祈祷をおこないます。松永様と御家来衆の武運もお祈り申

し上げます」

「何で、ここで祈禱を行うのじゃ、神社で行えばよいであろう。」

「全ては巫女の託宣によります。場所も日時も祭に使う調度も」

「しかし、ここは、城の前じゃ、戦が起こったらどうするのじゃ。」

「祭は夜明けまでには終わります。なにとぞ、お許してください。」

「無理じゃな、弾正殿もお許しになるまい。」

○

「御御城代様、実は、御御城代様に差上げるよう巫女より、託されたものがございます。どうぞ、お納めください。」

○

「金か、いくらある」

「百貫ございます」

「随分な額じゃ、・・それほどの願いならば頼みも聞かねばなるまい。よし今日に限って祭をここで行うことを許す。」

「ありがたき幸せにございます。」

1 1、齋庭(さにわ)(註 1)

「安岐、いや、巫女殿、立物はどのようにいたしましょう。」

「立物は二十本、差渡し十尋ばかりに丸く廻らせよ。」

「大石はどちらに」

「火床を二つ築き、薪を井桁に組み大石を据えよ」

「供物はどういたしましょう」

「火床の前に据えよ。」

○

「齋庭ができれば土師の族の者は、神社(かむやしろ)に戻れ。祭は吾一人で行う。祈禱により大石に封じたる荒御霊(あらみたま)、和御霊(にぎみたま)を解放ち、大いなる立物に注ぎ入れる。祭は明日の朝には終わる。その後、悪しき武士(もののふ)により、三つの屍が順に掘り起こされる、三つ目の屍が侵された時、大いなる立物が動く。大いなる立物の動く間、土師の族は決して神社から出てはならぬ。」

○

○

「禰宜殿、あの筒、いや立物は、大丈夫であろうか。」

「壺笠山には思うほどに立物がありませんでしたからな、しかたありますまい。」

「欠片全部合わせても三本分ではのう。」

「巫女殿のおおせのように、砕いて、粉にして、土に混ぜて立物作りしましたし、・・巫女殿も特に駄目だとおっしゃらぬし、まあ、よいのでしょうか。」

1)神祭を行う神聖な場所。原始神道では神殿はなく野外の齋庭で神事が行われた。

1 2、百舌鳥耳原御陵の砦(2)

「御城代様、御目にかけたき物がございます。」

「何じゃ。」

「先ほど、櫓の柱を取りかえんとして、地面を掘りましたところ、墓穴であつたらしく、屍があらわれました。ところが屍と一緒にこのような宝物(ほうもつ)が出ました。」

「これは、金の腕輪と翡翠の玉ではないか」

「御城代様、この山は元々御陵として築かれたもの、墓穴はまだあります。ここにはもっと多くの宝物が埋められておりますぞ。」

「よし、城の普請とあわせて、墓穴を探すのじゃ。宝物が出たらば、弾正殿にも献上しようぞ。」

「御城代様、屍の下も掘りましょう、古塚では、幾つもの屍を積重ねるように埋めると申します。下の屍ほど多くの宝物を抱いていると申しますぞ。」

「よし、熊右衛門、墓穴の探索はお前に任す。」

1 3、天王寺屋宗及の屋敷（2）

「旦那様、天神神社の宮司様、禰宜様が、お越しです。」

「これは、宮司殿、禰宜殿わざわざ、御運びいただき、恐悦にございます。」

「いや、宗及殿が明智殿との仲介をしていただいたおかげで、斎庭も無事でき、祭の準備も整いましたのでお礼に参りました」

「いや、天神神社は堺の産土神(うぶすながみ)でございます。祭に力を貸すのは当然の事でございます。」

「ありがたいことでございます。宗及殿、万代屋殿には随分ご迷惑をおかけしました。」

「そんなに気になさらずともよい。それより宮司殿、祭はどのように行うのかな。」

「それが、安岐、いや巫女殿が、祭は一人でやるゆえそれがしも禰宜も神社に帰れと申されますので、こうして、帰って参りました。」

「それは、奇妙ですな、祭りとなれば大勢の参った方がよさそうなものだが。」

「明日の、朝になると祭が終わり、大いなる立物が動くそうです。大いなる立物の動く間、土師の者は決して神社から出てはならぬ。と巫女殿は申されております。」

「その、大いなる立物とは、何ですかな。」

「全く分かりませぬ。本当に全く。」

1 4、耳原の御陵の砦（3）

「熊右衛門、あれはなんじゃ。いつ、あんな木偶の坊を立てたのじゃ。」

「は、おい、不寝番のものはおるか。早く呼べ」

○

「は、それがしが昨夜の不寝番にございます。」

「あれはいつ立ったのじゃ」

「あのような物がいつ立ったのか、全く気づきませんでした」

「役立たずめが、それでも不寝番か」

「申し訳ございません」

「誰か、立つところを見た者はおらぬのか。」

○

○

○

「御城代様、この地の百姓が申すには、明け方ようやく東が白んだころ、堀の中よりあの木偶の坊が音もなく現れ、立ったそうです。その折、波一つ起こらなかったそうです。」

「戯けたことを申すな、あれは十五間の高さはあるぞ、波一つなく立つものか。」

○

「熊右衛門、検分じゃ、すぐ、検分を行え。」

「は、分かりもうした。」

○

「熊右衛門様、熊右衛門様」

「熊右衛門は、今、木偶の坊の検分に行っておる。・・・何じゃ、申せ」

「御城代様、最初の屍の下からまた屍が出ました。そしてこのような金や玉と一緒に埋まっております。」

○

○

「これはすごい、玉は翡翠と瑪瑙じゃ、よし、さらに掘るのじゃ。屍はまだまだあるぞ。」

○

「御城代様にはきつく叱られたが、まったく気づかなかったのう。」

「そうじゃのう、・・・おい、今、木偶の坊が少し動かなかったか、」

「いや、気づかなかったが。」

15、耳原の御陵の砦（4）

「御城代様、検分は終わり申したが。なにやら、まったく。」

「分からぬのか。」

「はい。」

「随分百姓どもが集まってきたな。」

「はい、噂が口伝えに伝わり次から次に見物にやって参ります。もう、堺の町までも伝わっていることでしょう。」

「形を見ると鎧武者のようでもあるな。」

「先ほど、百姓の一人が古塚から出る土人形に似ておると申しておりました。」

「それは、これほど、大きいのか」

「いえ、とても、とても、一尺程のものだと。」

「・・・そうじゃ、あの巫女はどうした。昨夜、祭をするといっておった。」

「そういえば、おりませんな。祭の場はそのまま残っておりますが、しかし、あの祭でこんな大きな木偶の坊が、現れるとはおもえませんが。」

「とにかく、あの巫女を探せ、すぐ連れてくるのじゃ。」

「は、分かり申した。」

○

○

「熊右衛門殿。」

「熊右衛門は、巫女を探しに行ったわ。おまえは何故あやつがおらぬときに限って呼びに来るのじゃ。」

「申し訳ありません。・・・御城代様、実は、また屍が出ました。二つ目の屍より、二間程下からでました。それが夥しい金、銀、玉の宝物と一緒に。」

「戯(たわ)け者、それを早く申せ、すぐ案内(あない)せい。」

○

○

○

「すごい量じゃ。金だけでも何百貫あるか見当もつかぬ。一つ残らず掘り出すのじゃ。」

「は、かしこまりました。」

○

「御城代様。」

「今ごろなんじゃ、熊右衛門、わしは忙しいんじゃ。」

「昨夜の巫女がまた現れました。祭壇のまえの薪に火を放ち、大石を焼いて、祈祷をしております。」
「もういい、捨て置け、熊右衛門も手伝わんか。宝物を取出すのじゃ。兵も全部集めよ、もっと、穴を掘り広げるのじゃ。」

○

「汚らわしき疫(えだち)の鬼・・・、処処村村にこもり隠らふるをば・・・、千里のほか、四方の堺、汝行けたまひて・・・、急に罷き往ねと追ひたまへ・・・。姦ましき心を挟みて、留まり隠らば・・・、五の兵を持ちて、追ひ走り刑死さむものとぞ聞こし召せ・・・。おお一、おおお一、おお一。」(のりと)

16、天王寺屋宗及の屋敷(3)

「旦那様、旦那様、一大事がございます」

「何事ですか、うん、東の空に煙が見えますな、火事ですかな。」

「旦那様、耳原の御陵の木偶の坊が動きました。」

「なに。」

「はい、朝方、御陵の堀に身の丈十五間もある木偶の坊が出たとの噂が町に伝わり、手代を見分に遣りました。今、手代が知合いの百姓に借りたという馬を死にもの狂いで疾ばして、帰って参りました。それで、申すことには、あの天神神社の巫女が大石を焼いて木偶の坊に命を吹込み木偶の坊が動き出したとのことでございます。」

「なんとしたことだ。・・・巫女の言っていた立物とは、木偶の坊のことか。」

○

「宗及殿、宗及殿」

「野遠屋(のとや)殿か。」

「宗及殿、一大事ござる。すぐ逃げなされ。毘沙門天様じゃ、毘沙門天様が具現(ぐげん)されたのじゃ。もう、三国の坂を下り、すぐにも大小路(おおしょうじ)(註1)にかからんとしておる。毘沙門天様は憤怒の形相ものすごく、松永の兵を追ってどんどんこちらへ参られる。逃げ遅れた兵は踏み潰し、行く手を遮る物は家も橋もたちどころに砕かれる。もう、東の町では火事がおこっておる。私は先に逃げる。宗及殿も早く、早く逃げなされ。」

○

「よし、家の物を皆呼び集めるのじゃ、証文と金子を蔵に運び、蔵には目張りを、急ぐのじゃ。」

「はい」

○

○

「旦那様、天神神社からの使いの物が来ております。」

「え、すぐ通しなさい。」

「宮司よりの使いとして参りました。この文を。」

○

○

「・・・蔵の目張りはせずともよい、鍵だけを掛けて。すぐ天神神社に参ろう。」

「旦那様、しかし、もう火事が、火がだいぶ近くなってきました。」

「巫女殿が申されたそうじゃ。今、動いている立物は、御陵を侵し、屍を暴く不届きな武士を追っている。万代屋、天王寺屋には世話になったゆえ、危害は加えぬ。火事からも守る。早く天神神社に参れと・・・少し気になるころがあるが、ここは、巫女殿に従った方がよいと思う。店の者を全部集めなさい。すぐ、天神神社に参ろう。」

1) 堺を南北に貫くメインストリート。

17、岐阜城

「その毘沙門天たるや、身の丈十五間ばかり、甲冑に身を固め、劍抜くや、たちどころに、百舌鳥耳原の砦を粉々に打ち砕き、松永の御城代で殿様気取りの御城代伊予之助は、馬を走らせ、命からがら、湊にたどり着き、船に乗り、沖に出で、南蛮船に乗り移り、「やれ助かった。」と思ったのもつかの間、松永の配下の者を次々に踏み潰し、家々を打ち抜きながら追ってきた、毘沙門天が海辺に立ち、矢を番え、ひゅうと放つと、一里の海原を越えて、船端に突き刺さり申した。その拍子に、火薬に火が入ったらしく、船は粉々に砕け散りました。さて、・・・」

「もうよい、なんだ、おまえは、乱破(註 1)のくせに、なにを戯(たわ)けたことを申すのだ。おまえは、松永の動きを探るためにわざわざ堺に遣わしておる。それを、なんだ、今の迷いごとは、毘沙門天などおるわけがない。サル、この阿呆の首を斬れ」

「殿、本当に毘沙門天がおったのでござる。どうぞお助けを。」

「サル、はよう斬れ。」

○

「サル、はよう斬らんか。」

○

「殿、しばし、お待ちください。ここに控えし、伴天連(バテレン)が毘沙門天のことについて申し上げたきことがあると申しております。」

「ほう、伴天連に言いたきことがあるのか。申してみよ。」

「殿様。堺の町で松永の兵を打破ったのは、毘沙門天なる邪教の神ではありません。」

「お主は、何か知っておるのか。」

「はい、それは自動人形と申す物でございます。」

「・・・ほう、自動人形とはなんだ。」

「南蛮の優れた機械の一つでございます。その動きの源は強く粘りのある鋼の板であります。その板を丁度、春の野に生ずるぜんまいのように捲いてゆきます。強く捲ききると、自然に元の板に戻らんとします。その力をカラクリに伝え人形を動かします。南蛮でもっとも栄えし、ベネチアの都では、これらの人形どもが、食器の配膳をし、歌を歌い、戦に出ます。戦に出る人形は鉄の体を持っておりますゆえ、矢も鉄砲の弾も体に通すことはありません。」

「・・・うむ、そうか、そうだ、それだ、それに違いない。・・・その自動人形は、十間も十五間もの高さがあるのか。」

「それほど、大きいものは聞いたことはありません。私の聞きましたのはせいぜい人の背の倍ほどかと」

「そうか、伴天連、その自動人形は人と同じ様に動くのか。」

「はい、それはもう、自動人形のカラクリは鉄砲などよりはるかに緻密で、難しうござります。その動きも滑らかで人と全く変わるところがありません。」

「よーし、分かった。サル、どうやら毘沙門天とやらは、間違いなく自動人形じゃ。しかし、だれが、そのような物を南蛮から持ち込んだのじゃ。」

「三好の残党か、毛利か本願寺か、・・・わかりませんな。」

「・・・そうじゃの・・・。」

○

○

「よし、サル、すぐ湯漬を用意せよ。食ったら 出発じゃ。お前と、五人ばかり供をせよ。」

「殿、どちらへ。」

「堺に決まっておろうが、自動人形の見分じゃ。」

1) 草の者、スパイ

18、天王寺屋宗及の屋敷（4）

「大変なことでしたな。」

「いや、私もまさかこのような被害になろうとは。町は、焼け野原になって、納屋衆の家もほとんど焼け申した。」

「万代屋殿とうちだけ助かった訳は、他言無用ですな。しかし、もう、あの、立物は現れることはありませんまいな。・・・巫女殿は、何か言っておきませんでしたか。」

「それが、あれ以来、巫女殿、どころか神社の者全てが姿をくらましてしまいましたな。」

「なんと、何処(いずこ)へ消えたのでしょうか。」

「さあ、・・・それ以外にも、いくつか気になることが・・・。」

「ほう。」

○

○

「御城代針井伊予之助の配下の大半は踏み殺されたり、斬り殺されたり、伊予之助も船もろとも、砕け散ってしまいましたが、伊予之助の配下で、鮎士熊右衛門というのがおりましたろう。あれが一人、生き残って、多聞山の城まで、なんとか、たどり着いたそうです。」

「ほう。」

「子細を聞いた弾上殿は、烈火のごとくお怒りになり、木偶の坊を叩き潰してやると、出陣の準備をしておるようです。」

「なんと。」

「それから、町の者の噂ですが、・・・昨夜また、鳥船が東の空に浮かんでいたそうです。」

「本当ですか。」

「それを聞いて、私は、どうも胸騒ぎがして、神社に行ってみました。」

○

○

○

「社家の者はいまだに行方不明のままだったので、神社の近所に知り合いの男を訪ねて、社家の者の行方に心当たりがないか聞いてみると、・・・三日前に依網池(よさみいけ)(註1)に菱(ひし)を取りに行った折、安岐か篠らしい女が一人で池の水際で祈っているのを見かけたそうです。」

「ほー」

○

「女は巫女の装束ではなく普通の着物をきて、頭からすっぽりと頭巾をかぶり、目だけ出しておったそうです。それが池の水を掬うための手を伸ばした時、手の甲に痣のようなものが見えたそうです。」

「なんと・・・」

「男はそれを見たとき急にめまいがして倒れてしまい、夕方になってやっと正気になったそうですが、女も消えていたそうです」

○

「それは安芸か篠に間違いないのですか。」

「祈る姿が例大祭の神楽を舞う姿とそっくりであったから間違いないと申しております。」

○

○

「そういえば、河内国へ行ってまた戻ってきた立物が耳原の御陵に帰らず、入水したのも依網池でしたな。・・・まさか・・・」

○

○

○

「・・・宗及殿がまさか、と、思われていることを私も思っておるのです。」

○

○

○

「また、・・・立物が現れると、・・・。」

「今度は、納屋衆にも前もって不測の事態に備えるように言っておいた方が、よいかもしれませんな。」

宗及殿から言ってもらおうと、納屋衆も納得するでしょう。」

「・・・そうですね。」

○

○

「旦那様、オダ様という。御侍様が御見えです。」

「オダ様、誰だろう。」

「宗及殿、私はそろそろ、おいとまいたします。」

「そうですか。それでは、今後とも神社や巫女殿に何かありましたら、お知らせください。」

「御無礼いたします。」

1) 堺・松原・大阪の境にあった直径約1kmの大きな溜池。飛鳥時代に作られたという。

19、天王寺屋宗及の屋敷（5）

「さて、オダ様、というのは、どちらのオダ様じゃ。」

「はい、織田上総介様と。」

「まさか、・・・しかし、・・・いや、すぐ、私が出る。」

○

○

「宗及、久しいのう。」

「殿様、本当に吃驚いたしました。文でも頂ければ迎えに上がりますものを、御無礼のだん、重々御容赦下さい。」

「よいよい、忍びで来たのじゃ。気にするな。」

「これ、織田上総介信長様が御着きじゃ、すぐ、茶湯所にお通しを、さ、どうぞ」

○

「そうじゃ、殿様、茶の前に、湯殿にて湯浴みをなさいますか。」

「ほう、こんな時間に湯が沸いておるのか。」

「当家は商家ゆえ四六時中遠来のお客様が来られます。まず、湯殿にて湯浴みをしていただき、汗を流してから、お茶を差上げます。」

「気遣いすまぬな、サル、湯浴みをしようか。」

「は、私も一緒に入ってよいのでしょうか。」

「戯(たわ)けもの、お前が背中を流すのじゃ。」

「は、承知仕りました。」

「宗及、お前は、この猿面冠者(さるめんかじゃ)を知っておるか。」

「はい、羽柴秀吉様の御武勲の数々は、よくよく存じております。」

「サル、よかったのう、堺随一の商人に顔を覚えてもらい。」

「ありがたき幸せでございます。」

「それでは、どうぞ、湯殿へ。」

20、天王寺屋宗及の茶室(1)

「見事な道具じゃ。サル、これが天下の名物宗達棚(そうたつだな 註1)じゃ。」

○

「見事な道具でございますな。それがしは宗及殿がうらやましゅうございます。」

「サルは、わしに茶の湯の楽しみを許してもらえぬから、怨んでおるのであろう。・・サル、・・茶の湯の楽しみはもっと年を取ってからじゃ。今は城を一つでも多く抜くことを考えておればよい。」

「は、」

「宗及、このような見事な道具に囲まれておれば、商いなどせず、ずっと茶の湯を楽しんでいたいであろう。」

「いえ、殿様、商いあつての茶の湯でございます。よい道具も商いで儲けた金子がなければ買うことはかないませぬ。」

「宗及は、この上にもっとよい道具がほしいのか、欲張りものめ。」

「申し訳ござりません。」

「宗及、また岐阜に参れ。わしの道具で茶を点ててやる。」

「ありがたき幸せにござりまする。」

○

○

「・・さて、宗及はもちろん見たであろうな。あれを・・。」

「はい、命からがら逃げましたゆえ、ちらりとしか見ませんでした。」

「それはやはり毘沙門天の様であったか。」

「はい、確かに鎧武者のような風体でありましたが。・・」

○

「宗及、あれは、もしや自動人形ではないのか。」

○

「・・殿様なぜそのようなことをご存知なのですか。」

「はは、宗及は、わしを尾張の田舎者と見くびっていたのであろう。わしにもいろいろ知恵をつけてくれる者がいるのじゃ。」

「いえいえ、滅相もない、田舎者などとは、しかし、驚きました。自動人形のことを知る者は、この堺でもごくわずか、・・殿、実は、私もあれは、自動人形ではないかと思っております。」

「サル、どうじゃ、やはり、毘沙門天などおらぬのじゃ。」

「は、まことに。」

「自動人形は、堺の町を焼いた後、どこへいったのじゃ。」

「それが、・・これは、いろいろ、聞いた話をまとめたものですが。自動人形は、渚から矢を放ち、松永の御城代針井伊予之助様の乗った南蛮船を沈めた後、北へ向かって歩きだしました。それが、一刻(いっとき)ほど後には、早くも河内の守護所である高屋の城(註2)に着いたそうです。そこでも、城を粉々に砕き、城兵を悉く踏み潰しました。それから・・、これが、よく分からぬのですが、・・城の隣に八幡宮のある山がございます。・・もともとこれは応神天皇様の御陵(みささぎ)ですが、・・その山に向かって深々と一礼すると、剣を抜き近くにあった杉の木を十本ばかり切り倒し、枝を払い、一本一本根元まで山に突き刺しました。突き刺した痕をきれいに均し、また、山に向かって一礼すると、再び、元来た方角へ向かい、堺の間近まで戻って参りました。ところが、堺の町に戻ることなく依網池に入り消えてなくなったそうです。」

「ふーむ、わからんのう。高屋は三好一党の城じゃ。すると松永に逆らう者か、それは一体誰じゃ。それに、山に木を刺したのは、何ゆえじゃ。」

「大雨や地震により地滑りがおきたおりなど、再びおこらぬよう、木を何本も地面に打込み土留めする

ことがあるようですが・・・」

「ふーむ、わからんのう・・・」

「まことに。」

「宗及、自動人形でもやはり人形使いがおろう。お主に見当がつくか。」

「・・・それが、納屋衆の万代屋や天神神社の宮司の話によると天神神社の安岐という巫女が自動人形に魂を入れたと申しておりますが。」

「何じゃ、その、天神神社とは。」

「堺の産土神(うぶすなかみ)でございます。宮司が申すには、百舌鳥耳原御陵の砦を壊ちそこにいる悪しき武士を滅ぼすようにと天神神社の巫女が託宣し、立物・・・これが自動人形のことと思いますが、これを巫女が操って松永の兵どもを打ち滅ぼしたと・・・」

「百舌鳥耳原御陵というのは。」

「はい、仁徳天皇と申しまして大大和の根本を形作られた天皇様の御陵(みささぎ)です。そう言えば、高屋の城も昔の御陵の上に建っておりました。」

「先祖の墓を守るために自動人形を使う。・・・まさか、帝(みかど)がそんなことをするまい。・・・よし、サル、その、天神神社などとやらに行ってみよう。宗及、夕刻までには戻る、地図を画いてくれぬか。」

「私も同行いたしましょう。」

「いや、よい、商人は商いが大事じゃ、二人で行くゆえよい。」

「では、手代に道案内をさせましょう。」

「気遣い、すまぬな。」

○

○

「宗及、さっき、万代屋と言ったのは、万代屋了二のことか。」

「はい、さようでございますが。」

「よい肩衝(かたつき)を持っているそうじゃの。」

「殿様は、なんでもご存知で。・・・確かに万代屋は、茶の湯開山村田珠光(むらたじゅこう)伝来の名物肩衝投頭巾(なげづきん)(註 3)を持っております。」

「そうか、万代屋に会ったら、一度、見たいものじゃ、と伝えてくれ。・・・サル、行くぞ。」

- 1) 天王寺屋宗及の父宗達から伝えられた茶道具。茶道具を置く棚と茶話沸かす風炉、水差、柄杓立、柄杓、火箸、建水からなる一式の道具。
- 2) 城のある山は二十七代宣化天皇の御陵である。城主の三好氏は松永弾正がもと仕えていた大名であった。
- 3) 茶の湯の祖といわれる村田珠光から百舌屋に伝えられた抹茶を入れる小さな壺。当時は名物茶道具として有名だった。後に秀吉が手に入れた。

2 1、天神神社本殿 (2)

「殿、どうもおかしゅうござる。神社の本殿の周りにも神職の屋敷の周りにもおびただしい草鞋(わらじ)と蹄(ひづめ)の痕、轍(わだち)がございます。」

「おかしいのう、おい、手代の者、この神社は、無人だったのであろう。」

「はい、昨夜まではだれもおらず、このような草鞋や蹄や轍の痕はありませんでした。」

○

「近所の者に聞いて参りましょう。」

○

○

○

「殿様、近所の者の話では、今朝、夜明け前に神職や巫女、社家の者達が、戻ってきて調度を運び出し荷車に積み出て行ったそうです。」

「何処へ行ったのじゃ。」

「それが、山之口筋を北に向かって行ったそうですが、何処まで行ったのかは分からぬと。」

「おかしいのう、自動人形が暴れて火事が起こるのを恐れて調度を持ち出したのか。」

○

「殿。」

「なんじゃ、サル。」

「あちらから、多くの兵が参ります。どうも、松永の兵かと。何処へ、隠れませぬと。」

「心配ない。堺は公界(くがい)の地(註 1)じゃ。この地では、如何なる敵同士でも刃傷沙汰はない。」

「しかし、殿。」

「分かった、分かった。あの、屋敷の影に隠れて、見物いたそう。」

○

○

○

○

○

「随分の兵じゃな。ざっと、千はおる。手代の者、この方向だと兵どもは、何処へ行くのであろうか。」

「おそらく、耳原の砦かと。」

「砦は、堺の町の外じゃ、我等もさすがにそこまでついては行けぬな。」

「殿、町を出たところで、たちどころに殺られます。」

「仕方あるまい。宗及の屋敷に帰るか。」

- 1) 中世の堺は納屋衆の合議による自治が行われた。堺の町の中では武士といえども堺の掟に従い、刃傷沙汰は許されなかった。このような場所のことを「公界の地」という。

2 2、天王寺屋宗及の茶室(2)一翌日一

「朝茶(註 1)は良いの、朝は気分が清々しいし、体に力が漲っておる。茶もうまい。よい道具で飲む茶は特にうまい。」

「殿様、今日は特にもう一つ、御道具を御目に掛けましょう。」

「善幸(ぜんこう)茶碗(註 2)と文琳(ぶんりん)(註 3)を見た上にまだ、見せてくれるのか。」

「はい、殿が申されました投頭巾を万代屋から借りておきました。どうぞ、ご覧になってください。」

「おお、これが、投頭巾か。大きな壺じゃの、土は粗いが、実に堂々としておる。良い道具じゃ」

○

○

「サルも見たいか。」

「はい、是非に。」

「駄目じゃ、と言うたら、どうする。」

「この場で、泣きまする。」

「それは、いかん、泣き面のサルなど見れば茶が一度にまずくなる。そら、見よ。」

「ありがたき幸せ。」

○

「宗及、松永の兵はどのようにしておる。弾上も来ておるのか。」

「いや、弾上殿は、来ておらぬようです。」

「やはりな、弾上が城を空けることはなかろう。これまで、何度も主君の首をかいてきた男だ、よく知っておるわ。兵どもは何をしておる。」

「それが、針井伊予之助の配下と同じで、耳原の砦で宝捜しに狂奔しております。」

「なに、宝があるのか。」

「伊予之助が掘った穴の底にまだ宝が会ったようで、穴を広げ、宝を掘上げております。・・それから、松永の兵等も自動人形に魂を入れたという巫女を探しに天神神社に行ったようですが、捕まえることが出来ず、今は何人かに命じて神社の近辺を探索させているようです。」

○

○

「宗及、今、何か揺れなかったか。」

「確かに。」

「また揺れた。」

「はい。」

「失礼いたします。殿様、釜を下します。」

○

「旦那様、一大事でございます。」

「なんだ。」

「木偶の坊がまた、現れました。」

「どこに、出ました。」

「屋敷の前の往来を北から歩いて参ります。」

「往来を歩いてくるのか。」

「はい、真っ直ぐ来ます。」

「よし、サル、ゆくぞ。」

「は。」

「自動人形がこの屋敷を通り過ぎたら、後を追うのじゃ。」

「殿、危うございます。」

「分かっておる。堺の町からは一歩も出ぬ。さあ、サル、支度じゃ。」

- 1) 夜明け前から行われる茶会のこと。
- 2) 宗及が所持している有名な青磁の抹茶茶碗。
- 3) 宗及が所持している有名な抹茶壺。文琳とは林檎のことで形が林檎に似ていることからそう呼ばれた。

23、田出井山(註1)の齋庭

「籐、いや、巫女殿、大石はこのように据えればよろしいでしょうか。」

「よし。」

「立物もこのように・・。」

「すべて、耳原の御陵の齋庭のごとくすれば良い。・・族の者よく聞くのじゃ、齋庭の支度が出来れば、神社にもどれ。一刻後には、大いなる立物が悪しき武士どもを滅ぼし、この地まで歩み来る。吾は、荒御霊(あらみたま)、和御霊(にぎみたま 註2)を立物から抜き、再び大石に封じる。御霊を抜かれた大いなる立物は、自ら崩れ落ち、土に戻る。族の者は、今より二刻後、齋庭をかたづけに参れ、齋庭を廻る立物は、粉々に打砕き、深き穴を掘りて埋めよ。大石は、吉備の国の神社に戻し、齋(いつ)き祭れ。よいな、支度を急ぐのじゃ。」

「は、承知仕りました。」

○

○

「・・高天ヶ原にまします神ろみの命をもちて・・、汚らわしき疫(えだち)の鬼(おに)刑死おわせしめ・・、皇孫の命定まりぬ・・。いま、雑雑の物を横山のごとく置き高なりして・・、たてまつるうずの幣帛を、安幣帛(やすしで)の足幣帛(あししで)と平らけく聞こしめして・・、平らけく、斎ひ鎮めまつらく・・。おおー、おおおー。」(のりと)

- 1) 塚の北西にあり十八代反正天皇の御陵とされる。
- 2) 神威の荒々しい部分が荒御霊、静かな部分が和御霊とされる。盾築遺跡の亀石(大小)二点を両御霊を封じ込める石とした。

24、耳原の御陵の砦(4)

「熊右衛門殿、例の巫女が見つかりましたぞ。」

「でかしたぞ、何処におったのじゃ。」

「ここから、一里ほど北の田出井山というところがございます。また、石を焼いて祭をしようとしております。」

「いかん、あの木偶の坊がまた、現れるかもしれん。よし、お前が、十人ほど連れて行き、巫女を取押さえ、有無を言わさず斬り殺せ。よいな、すぐ行け。」

「は、分かり申した。」

○

「熊右衛門殿、金、銀、宝物は全て掘出し、車に積み終わりました。」

「よし、荷車は、大和、摂津の二手に分かれて、多聞山に帰るのじゃ。木偶の坊が出る前に急いで出発じゃ。」

「熊右衛門殿、木偶の坊が、現れました、三国の坂を、こちらめがけて、登って参りまする。」

「しまった、ええい、もう少し早く出発しておれば、・・仕方がない。荷車は早く、多聞山へ向かえ。坂の上に大筒を並べるのじゃ。十分やつを近づけてから、一勢に撃つのじゃ。よいな。」

「は。承知仕りました。」

25、天王寺屋宗及の茶室—1ヵ月後—

「宗及殿、なにやら、夢のような一月でしたな。」

「万代屋殿も随分ご苦労なされましたな。」

「いやいや、私は右往左往してただけで、・・しかし、こうして宗及殿の点前で、お茶をいただいていると、すべてが遠い昔のような気がします。」

○

○

「神社はどうなりました。」

「ええ、もう普通に、戻りました。・・そう言えば、例の大石を、船に積んで備前の国に返しに行ったようです。」

「巫女はどうしました。」

「それが、社家の者が田出井山の斎庭を片づけて、神社に帰ると、二人とも戻っておったそうです。安芸も篠も祖神が憑いておった間のことは全く覚えておらぬようで、体の痣はきれいに消ておると。」

「それは、それは、よかった・・。松永の兵どもは、一人残らず討取られたのですか。」

「見事なほどに、最後の一人まで・・。そうそう、田出井山の斎庭に近くには三間もある矢に兵に五人

ずつ、まるで串団子のように射抜かれて死んでおりました。げに恐ろしきことにございます。耳原の陵から三国の坂にかけては、踏み潰されたり、斬殺された屍が数知れず・・・。熊右衛門も今回は助からなかったようで・・・。」

「十門の大筒も自動人形には、役に立たなかったと様ですな。」

「蚊がとまった程にも感じなかったようです。」

「しかし、あれほど大きなものが消えてなくなるとは・・・。不思議なことじゃ。」

○

○

「・・・信長様は、どうされました。」

「・・・立物が消えた日の夕刻、京の丹羽殿から書状が来て、それを見るや、急遽、岐阜に帰られました。」

「ほう、何ゆえかな。・・・もしや・・・、弾上殿のことで・・・。」

○

「御察しのとおり、將軍様を奉じて挙兵されたことを早々と御知りになり・・・。」

○

「伊予之助や、熊右衛門が出来るだけ多くの金や宝物を運び出そうとしたのも・・・。」

「挙兵の軍資金でござるよ。」

「しかし、多聞山まで持帰ることは、叶いませなんだなあ。」

○

「將軍様も弾上様も多分、一年は持ちますまい。」

○

○

「しかし、宗及殿、信長殿に見せるから投頭巾を貸せといわれたときには肝を潰しましたぞ。間違いなく信長殿に召上げられるかと、思いました。」

「申し訳ない。ご心配を掛けて。信長殿はあのように枯れた趣の茶入は、はなから気に入らぬと思っておりましたが、しかし、申し訳ございませなんだ。」

26、河内の国 土師氏の館（古墳時代—532年—）

「一年(ひととせ)たったの。」

「・・・はい、新しき、大王様も御位(みくらい)につかれましたし、今年は気候もよく、豊作のようで、昨年とは別の世のようでございます。」

「巫女は帰ってきたか・・・。」

「それが・・・、昨日、鳥船が南の空に現れ・・・、今朝、土師の族の女が二人、赤子を産みました。二人とも女子(おなご)で、肩の下に土師の御印が、くっきりと現れておりました。実は、先の世に旅立った若き巫女にも同じ場所に御印があったとのことで、生まれ変わりであろうと。」

○

「そうか、帰ってきたのか、先の世では、立派に仕事をやり遂げたのであろう。」

○

「大連様、宴(うたげ)の準備が出来ております。どうぞ、お運びください。」

「この慶事(よきこと)を祝い、若き巫女を称える宴・・・よし、大いに飲むか、・・・しかし、若き巫女が赤子になってしまったのは少し寂しいのう・・・。見目良き巫女であったののう・・・。」

エンディングテーマ(退出音声・千秋楽)

*もの悲しい短い曲です。

— (終) —